

〔先哲叢談 後編一〕小倉三省○中土佐人仕于國侯、

三省與野中兼山底續於土州、當時之人數稱國有其人、而兼山果處多、寬處少、加旃以嚴毅威重、進退規矩、才有饒德、不膽三省反之、溫柔寬量、莫與物忤、擲節退讓、不好急遽、嘗諫兼山曰、公強欲知人、而好用明、厥照非自然、恐反入過察、夫明者順理、先覺之謂、猶堯知丹朱之歸、訟是也、察者逆詐、億不信之謂、猶德宗疑察、却為奸佞被罔是也、用意公私、辦事緩急、相去何啻千里、競々業々、須慎事於始、毋貽悔於後、至三省歿、亦無爭友、補弼闕隙、事寢安肆、特其植功、以至奢靡、與諸大夫不和、為之所讒、遂至自殺、

雜載

〔日本書紀二十五〕大化二年二月戊申、天皇幸宮東門、使蘇我右大臣詔曰○中、朕前下詔曰、古之治天

下朝有進善之旌、誹謗之木、所以通治道而來諫者也、皆所以廣詢于下也○中、所以懸鍾設匱、拜收表

人、使憂諫人納表于匱、詔收表人、每旦奏請、朕得奏請、仍又示群卿、便使勘當、庶無留滯、如群卿等、或懈

怠不勤、或阿黨比周、朕復不肯聽諫、憂訴之人、當可撞鍾、詔已如此、既而有民、明直心懷、國士之風、切諫

陳疏、納於設匱、故今顯示集在黎民、其表稱緣奉國政、到於京民、官官留使於雜役、云云、朕猶以之傷惻、

民豈復思至此、然遷都未久、還似于賓、由是不得不使、而強役之、每念於斯、未嘗安寢、朕觀此表、嘉歎難

休、故隨所諫之言、罷處々之雜役、昔詔曰、諫者題名、而不隨詔命者、自非求利、而將助國、不言題、不諫、朕

廢忘、

〔駿臺雜話三〕直諫は一番鎗より難し

駿府の御城に御座なされし時、御側に侍座の衆へ上意○徳川ありしは、人君はよき家老を持へ

き事なり、我常におもふに、主君の惡事あるを見て、主君の怒をもかへり見ず、諫言をいゝ、家老

は、戰場にて一番鎗をするよりも、遂にまさりたる心ばせといふべし、其子細は、敵に向て勝負を

するも、身命をかばひてはならぬ事なれども、必敵にうたるべきにもあらず、たとひ討死しても、

世に名をのこし、主君にもおしまれぬれば、死しても本望なる事なり、又敵を討取ぬれば、主君の